

第32回 郷土の先賢顕彰者紹介

3階 郷土先賢室



富山が生んだ 日本ジャズ界の先駆者・牽引者

原 信夫 (1926~2021)

原信夫（本名 塚原信夫）は、ジャズ界の『ビッグボス』であり、シャープス・アンド・フラッツのリーダーとして、一世を風靡した。大正15年（1926）11月19日、樺太（現サハリン）で生まれ、家族で滑川町（現滑川市）に移住。間もなく実母が亡くなり、東岩瀬で漁業を営む塚原家の養子になった。音楽との出会いは、尋常高等小学校で音楽教師からコルネットを渡され、「吹いてみる」の一言から始まる。

卒業後、富山市の機械工業青年学校へ入学し、テナーサクソと出会う。昭和18年（1943）、海軍軍楽隊に入る。終戦後、軍楽隊の先輩から「ジャズをやろう」と誘われ、ジャズミュージシャンの道へ進むことを決意した。昭和26年（1951）にシャープス・アンド・フラッツを結成。活動範囲を広げるとともに、個性豊かなアレンジでコンサートバンドとして人気を博した。また、アメリカの一流楽団の演奏スタイルを吸収、躍動感のあるその演奏は海外の音楽家からも注目された。昭和34年（1959）NHK交響楽団との共演が好評を博し、2年後に再共演。さらに、日本フィルハーモニー交響楽団とも共演した。これらを通して日本にジャズが少しずつ浸透していった。同時に、「日本人ならではのジャズ」の確立を目指し、昭和42年（1967）には、世界のジャズミュージシャンの檜舞台だった米国ニューポート・ジャズ・フェスティバルに日本人として初出演した。自作の「古都」や「ソーラン節」など邦楽を交えて演奏し、ニューヨークタイムズ紙などから絶賛され、高い評価を得た。

平成22年（2010）2月11日のコンサートを最後に、原は音楽活動に終止符を打った。ビッグバンドを60年余り結成し続けられたのはなぜか。ひとえにその人柄によるところが大きい。ビッグバンドは大所帯だから、人間関係が難しい。運営するスタッフもいるから、維持することは大変なことである。原は、誰とでも親しく付き合い、包容力と統率力があつた。これがバンドのサウンドにも出ていた。結束力、まとまりがある音、すばらしいアレンジを起用してアレンジも新しかった。こうしたバンドへの姿勢は、現在に至るまで、後世のジャズミュージシャンたちにも大きな影響を与えている。

活躍はジャズにとどまらない。シャープス・アンド・フラッツの演奏による「富山県民の歌」（第13回富山国体歌）のレコード化。9回に及ぶNHK紅白歌合戦紅組の演奏。また、美空ひばりの「真赤な太陽」の作曲も手がけた。さらに、平成2年（1990）頃から、原自身やバンドの所属メンバーが、全国の学校のブラスバンド部を訪れて音楽の指導をしたり、若い音楽家の活動を支援したりした。

長く日本ジャズ界を牽引し、日本の音楽文化への貢献度が評価され、昭和63年（1988）紫綬褒章、平成10年（1998）勲四等旭日小綬章を受章した。

平成20年（2008）11月1日から始まったファイナルコンサートツアー（8日富山で開催）に寄せて、原はこう告げた。「生涯かけてきたジャズを新たな世代に託す。ジャズを愛し、出会えたことに感謝している。信じ、崇めている。神様のようなものだ。ここまで続けることができたのは、そんな思いからだ。ジャズは人生そのものだ」と。この言葉通りの生涯を送り、令和3年（2021）6月21日逝去。享年94歳。

<専門員 平野 強>



シャープス・アンド・フラッツ（黒いスーツが原氏）
（額賀真理子氏提供）



クインシー・ジョーンズと（「# & b 50年誌」より）